

# 世界漫遊旅行者と庭園

—— エラ・クリスティーの日本旅行とコウデン城の日本庭園造園 ——

## Globe-trotters and gardening: Ella Christie and Japanese garden at Cowden Castle, Scotland

橘 セ ツ

キーワード： 1. 世界漫遊旅行者 2. スコットランド 3. 日本庭園 4. エラ・クリスティー

**Key Words:** 1. Globe-trotters 2. Scotland 3. Japanese gardens 4. Ella Christie

### ABSTRACT

This paper explores travel and gardening in the context of lifehistory/lifegeography of Ella Christie (1861-1949), from a wealthy mine-owning family. She travelled widely to the world such as India, Tibet, China, Japan, Central Asia, Samarkand, Russia, United States and Cuba, on the other hand she managed her estate at home, Cowden Castle, Scotland. Japanese garden was fashionable in early twentieth century Britain, the motivation of Ella Christie's creation of Japanese garden at her estate, was clearly the result of her encounter with Japanese gardens while on her journey to the Far East in 1907. At Cowden Castle, the employment of Japanese garden designers and gardeners helped in the creation and management of an "authentic" Japanese garden. At Cowden Castle, Japanese garden ornaments such as stone lanterns and bridges were crucial elements of the gardens. This paper examines that both her travel to Japan and creation of the Japanese garden at Cowden Castle through the primary archive documents. These documents shed some light on the exact process of the creation of the Japanese garden.

### I. はじめに

旅先で人びとは、日常生活で日々経験しているあたりまえの風景とは、かけはなれた異文化の風景に出会う。旅先では、異文化のエキゾチックな風景が人間の五感に押し寄せてくる。(リード, 1993) 見慣れない風景、聞き慣れない音、嗅いだことのない香りや臭い、その他、触覚や味覚を総動員して異文化の風景を経験する。

興味深いことに旅先で経験した異文化の風景は、旅行が終わり故郷での日常生活に戻ってからも、その旅行者の人生に影響をおよぼし続けることがある。本稿では、そうした事例のひとつとして、エラ・クリスティー Ella Christie (1861-1949) の旅行とその後の人生をとりあげ

る。彼女は、ヴィクトリア王朝時代の1861年にスコットランドで生まれ、エドワード王朝時代、第一次世界大戦の時代を経て、第二次世界大戦中に晩年を過ごして1949年に没した。エラは、1907年（明治40年）に日本を訪れているときに彼女の人生を変えるような風景に出会った。

エラは、スコットランドのクラックマナンシャーにあるコウデン城 Cowden Castle で女主人として日常生活をおくる一方で、広く世界を訪れた世界漫遊旅行者でもあった。エラは、1907年に日本旅行をしたときに、多くの日本庭園を訪れ、その美しさに魅せられ、故郷の地所であるコウデン城に日本庭園を造園することを決意し、実行する。

次に続くⅡ章では、エラのような世界漫遊旅行者とは、どのような人びとのことをさし、どのような旅行のスタイルで、どのような文化的潮流をつくりだしたのか、また19世紀後半から20世紀前半にかけて、英国で流行した英国の日本庭園とはどのような文化的活動であったのかということについて簡単に説明する。Ⅲ章では、エラのライフヒストリー／ライフジオグラフィー (Daniels and Nash, 2004) に焦点をあてる。エラの人生は、裕福な炭鉱経営者の娘としてはじまり、父親が亡くなった後には、自由に世界漫遊旅行者としての人生を謳歌する一方、コウデン城の女主人として地所管理を行った。Ⅳ章では、本稿で参照するコウデン城の日本庭園 ‘Shah-rak-uen’ の文書文献資料について紹介する。Ⅴ章では、Ⅳ章で紹介した資料からみることができる ‘Shah-rak-uen’ 造園のプロセスについて考察する。まず、エラの日本庭園造園の契機となった彼女の日本滞在時の行動について考える。次に、具体的に ‘Shah-rak-uen’ 造園に関わった3人の日本人がどのような役割をそれぞれ果たしたのかについて分析する。最終章のⅥ章では、コウデン城の日本庭園 ‘Shah-rak-uen’ のもっている社会性という側面について考察する。

彼女の日本旅行記録には、彼女にとって異文化である日本に対する「まなざし」‘gaze/way of seeing’ を読み解くことができる。くわえて、彼女が日本旅行からの帰国後に故郷の庭園で実践することには、彼女の「生き方」‘way of life’ をみることができる。

## Ⅱ. 世界漫遊旅行者と英国の日本庭園

### i) 19世紀後半に誕生した世界漫遊旅行という文化潮流

世界漫遊旅行者を意味する英語 globe-trotters は、1870年代に新しく誕生した言葉である。The Oxford English Dictionary (second edition, 1989) による globe-trotters の定義は、「観光のために広汎に急いで世界中を旅すること」‘extensive and hurried travelling over the world for the sake of sight-seeing’. (Vol. VI, p.583) とあり、初期の使用例として、E. K. Lairdが1875年に刊行した旅行記のタイトル *Rambles of a globe-trotter in Australia, Japan, China, Java, India and Cashmere* が示されている。

1830年代に英国で生まれ発達した旅客鉄道が19世紀後半を通じて世界中に広がり鉄道網を形成した。また、蒸気船が改良され、旅客を定期的に輸送する航路が発達し、大洋を移動できる

ようになった。これらの交通機関の発達を通して人びとが快適に移動できる物理的距離が飛躍的に広がったのが19世紀後半である。SF小説家ジュール・ヴェルヌが、『80日間世界一周』を刊行したのは、1873年である。この時代に、開通したばかりの鉄道列車や豪華客船に乗って世界漫遊旅行にでかけることは、富裕層によって最も好まれた贅沢なレジャーであった。旅を大衆化させたことで功績のある英国の旅行業者トーマス・クックは、富裕層の贅沢な世界一周旅行の売り出しにも熱心であった。(井野瀬, 1996; ブレンドン, 1995; 本城, 1996)

世界漫遊旅行者が1870年代にすでに横浜におしよせていた。福井に長く住んだ科学教師のグリフィスは、1876年に刊行された *The Mikado's Empire* のなかで、世界漫遊旅行者のことを「すでに横浜では世界一周の観光客がふえ、一時はその数も非常に多くなり、特殊な階級と見なされるほどになった。港の俗な言葉でその人たちのことを「世界漫遊旅行者」「globe-trotters」と呼んでいる。」(グリフィス, 1984) と紹介している。

エラ・クリスティーが、1907年に日本を含むアジアへの旅行を行ったのは、このような時代であった。

## ii) 英国の日本庭園

1860年に、外交官のオールコックと植物学者ヴィーチやフォーチュンが日本を訪問して以来、日本の植物と日本庭園は英国の園芸愛好家たちにインパクトを与え続けた。英国人たちは、英国の気候に順応する耐寒性のある多様な植物を求めて世界中を探索していたが、日本はその目的に合致する豊富な植物相があり、園芸技術の進んだ国であった。日本の開国以来、日本の植物についての情報は英国の園芸愛好家たちに熱狂的に受け入れられた。植物育種商ヴィーチが、1863年にロンドン近郊サリーの Warren House に造園した日本庭園が、英国初の日本庭園だと考えられている。しかし、それは、本格的な日本庭園というより日本から移入した植物をならべるショーケースのようなものだったと記録されている。(Conway, 1988)

また、日本庭園は、万国博覧会を通じて世界に紹介されてきた。英国の初期の事例では、1873年にウィーンの万国博覧会で展示された日本庭園が、後にロンドンのアレクサンドラ・パレスに移設された。そこでは、英国人がエキゾチックだと考えるような日本や東洋風の品物を展示即売するようなマーケットも兼ねていた。(Conway, 1991)

そのころに、日本庭園を指す場合によく使われた言葉は、「ウィロウ・パターンのような」という言葉である。ウィロウ・パターンというのは、中国の影響を受けた英国製のデザインである。ウィロウ・パターンの皿のデザインにはいくつかのヴァリエントが存在する。写真のウィロウ・パターンの皿は、英国で1800年代中期に製造された典型的なものである。ジグザグの垣根があり、その中には城郭があり、その左横には大きなウィロウ（柳）が4枝、風にたなびかせ、右後ろにはリンゴの木が大きな実をつけている。この島から隣の島へは橋があり三人が歩いている。湖には帆船を一人が漕いでいる。その向こうには島があり、家がある。空には二羽

の鳥が向かい合って飛んでいる。このウィロウ・パターンのデザインは、長く現在まで英国で愛されている。特に、田舎のコテージの壁や飾り食器棚にこのデザインの楕円形の大きな皿が飾られることが多い。このデザインは、直接的には、18世紀に英国で流行した中国風のデザインであるシノワズリーの影響を受けたと考えられるが、19世紀後半から20世紀の英国で英国人が日本庭園について考えるときや語るときにも基層にあるようなステレオタイプ化された東洋の庭園のイメージである。

後に、最も本格的な日本庭園が日本人によって博覧会で展示されたのは、ロンドンのシェパードブッシュにあるグレート・ホワイト・シティで、1910年に開催された日英博覧会の会場である。ここでは、2種類の日本庭園が造園され展示された。甲園 Garden of Peace は、小沢圭次郎によってデザインされ、乙園 Garden of Floating Isle は、本多錦吉郎によってデザインされた。(Official Report, 1911)

本格的に日本庭園についての情報が英語文化圏に紹介されたのは、長期日本滞在したお雇い外国人建築家ジョサイア・コンドルによる *Landscape Gardening in Japan* (1893) の刊行による。この本の初版は、横浜や東京で開業していた英国系の出版社の Kelly and Co. Tokio で刊行された。鈴木誠が解説するように、このコンドルの *Landscape Gardening in Japan* (1893) は、造園家であり洋画家でもある本多錦吉郎が著した『図解庭造法』(1890) のリトグラフ図版の挿絵をコンドルが引用して、英語文化圏へ日本庭園をイラスト入りで紹介した書物である。(本多・鈴木, 2007) このコンドルの書物が1893年に刊行されて以降、多くの日本庭園が英国でも造園された。ところで、コンドルの *Landscape Gardening in Japan* (1893) の初版は、大型の豪華本である。表紙は、緑色のクロス装幀の背景に庭園風



図1 英国製のウィロウ・パターンの皿。  
1800年代中期。直径280mm。  
(出典：筆者のコレクション)

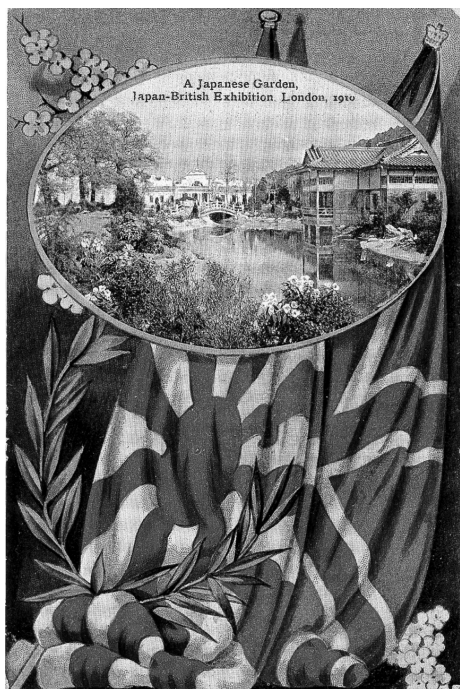


図2 ロンドンで行われた日英博覧会  
(1910) の日本庭園のポストカード  
(出典：筆者のコレクション)

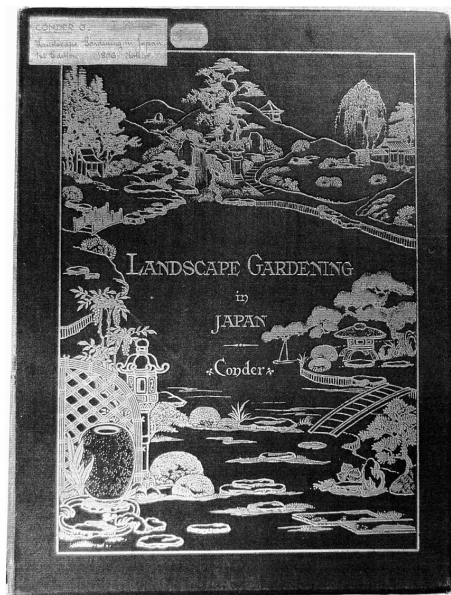


図3 ジョサイア・コンドルによる  
*Landscape Gardening in Japan*  
(1893) の表紙

景が線画で金彩色されていて、美術作品のようなつくりである。別冊には、コロタイプ写真による豪華写真集もある。このような高価な書物を購入することができるマーケットを考えると、贅沢な世界漫遊旅行をすることのできる富裕な社会階層と重なる。このような豪華本を購入することのできた世界漫遊旅行者は、自邸に日本庭園を造園する可能性のある階層の人びとだと考えられる。

19世紀後半以降イングランドの著名な日本庭園について、ジョサイア・コンドルの著書がいかに参考にされて造園されたのか地図化してまとめたのが図4である。

筆者は、英国において日本の風景がどのように表象されてきたかという問題に焦点をあてて、20世紀のはじめに英国で多く造られた日本庭園について文献資料調査・フィールドワークを行ってきた。これらの研究では、異文化間の出会いにともなう環境観のダイナミズムについて注目し、文化接触、トランスカルチャレーション、異種混濁性（ハイブリッド）が、人間と風景の関係にどのように表象されるのかという問題を扱った。（Tachibana, 2000; Tachibana et al., 2004; 橘, 2006）本論文は、これらの継続的発展である。

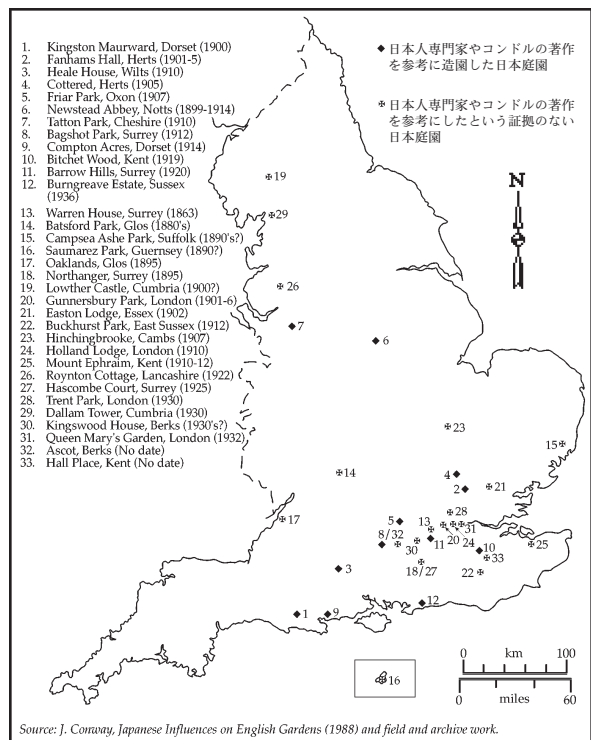


図4 イングランドの日本庭園とジョサイア・コンドルの  
*Landscape Gardening in Japan*の影響  
(出典：Tachibana et al., 2004を改変)

### Ⅲ. エラ・クリスティー（1861－1949）のライフヒストリー／ライフジオグラフィー

#### i) 裕福な炭鉱経営者の娘として生まれる

エラ・クリスティーは、1861年にスコットランドの裕福な炭鉱主の一家に娘として生まれた。エラの家は、スコットランドのクラックマナンシャーにあるコウデン城 Cowden Castle だった。エラの両親は、炭鉱経営に成功し富を築き、成功の証としてコウデン城を購入して、自らの住居とした。

エラの生まれた2年後に妹のアリスが生まれた。エラとアリスは、生涯を通じて仲のいい姉妹であった。彼女たちは、成長してそれぞれの人生を生きたが、お互い離れて過ごしている間、とくに旅行先からはまめに書簡のやりとりを行っていた。彼女たちは、当時の上流階級の慣習にならって学校教育を受けることはなかったが、彼女たちの父親のジョン・クリスティーは、娘たちの教育には熱心で旅行することによって娘たちの見聞を広めることを重視した。だから、子どもたちに歴史文化遺産から当時最新の産業施設まで幅広く見学させるために、一家はヨーロッパ中を、広汎に旅行してまわった。妹のアリスは、17歳のときに結婚して、アリス・ステュワートとなり生家を離れ、マードストーン城 Murdostoun Castle に住んだ。姉のエラは、一生結婚しないで、コウデン城に住み、女主人として邸宅と地所を管理する一方、自由に広く世界を旅行して過ごす人生を選んだ。

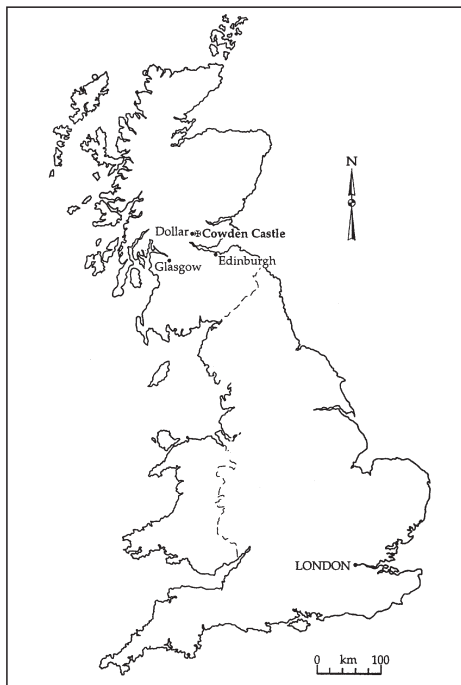


図5 コウデン城 Cowden Castle の位置



図6 エラ・クリスティーの肖像写真  
(出典：Robert Stewart 氏提供)

## ii) 世界漫遊旅行者としてのエラ・クリスティー

エラの父親のジョンは1902年に亡くなった。その後、エラの世界漫遊旅行者として人生が始まる。彼女は、1904年にインドへ出発したのをはじめ、チベット（1904）、中国・日本（1907）、中央アジア、サマルカンド（1910）、ロシア（1912）、アメリカ合衆国・キューバ（1914）などを訪れた。その他、彼女は、広くヨーロッパやアフリカへも広汎に出かけている。エラは、旅行にでかけると、詳細な旅行記録を妹のアリスへ手紙で書き送った。

エラの世界漫遊旅行者としてのハイライトは、中央アジアのヒバハン国（Khiva）を訪れた初の英国人女性となったことであり、エラは *Through Khiva to Golden Samarkand* という旅行記を1925年に刊行している。エラのヒバとサマルカンドへの旅は、世界漫遊旅行を超えて地理学的探検という側面もあり *Royal Scottish Geographical Society* に当時の写真などが所蔵されている。文化史家 Dea Birkett は、1989年に刊行した *Spinsters Abroad: Victorian Lady Explorers* で、エラ・クリスティーを、当時の著名な女性探検旅行家、メアリー・キングズレー、マリアンヌ・ノース、イザベラ・バードなどと同列に扱っている。

エラが、メイドのハンフリーをともなって日本へ向かって旅立ったのは、1907年だった。エラは、スコットランドの羊毛を紡いでつくった手織物で仕立てたいつもの普段着で出発したので、駅で彼女を見かけた友人は、日帰りでエディンバラへ出かけるのだろうと思ったほどだ。彼女は War Office に勤める友人 Colonel Aylmer Haldane から教えられた「Nicki e Dome Banzai（日英同盟万歳）」という唯一の日本語を覚えて日本へ出発した。（Stewart, 1955）

## IV. コウデン城の日本庭園 ‘Shah-rak-uen’ の資料

エラ・クリスティーは世界漫遊旅行者であるとともに熱心な園芸愛好家でもあった。彼女はスコットランドの地所に帰れば、コウデン城の女主人として地所管理をとりしきっていた。エラは1907年の日本旅行で、日本庭園と出会ったことをきっかけに、コウデン城に日本庭園を造園したいと思った。彼女の選んだのは、城から半マイルほど離れた窪んだ沼地であった。そこは、すぐ近くに森と霧がかった丘 the Ochils があり、ロマンティックな雰囲気漂う場所だった。彼女の日本庭園は、‘Shah-rak-uen’ と命名された。エラは、‘Shah-rak-uen’ とは、「愉しみと喜びの場所’ ‘a place of pleasure and delight’ だと説明を受けた。‘Shah-rak-uen’ は、彼女の楽園 “Elysium” でもあった。

‘Shah-rak-uen’ について、筆者が調べたのは次の4種類の資料である：

- (a) 第一次資料（主に手稿の書簡）：A Folder of Papers, 1908-33, concerning the Japanese Garden at Cowden in the Stewart-Christie Papers (Box 10. XIII Miscellaneous-3) National Library of Scotland に所蔵される。
- (b) エラとアリスが執筆した自叙伝 Ella Christie and Alice Stewart *A Long Look at Life: by two Victorians*. (1940) に所収される ‘Chapter 20. A Japanese Garden.’ (p.234-239)

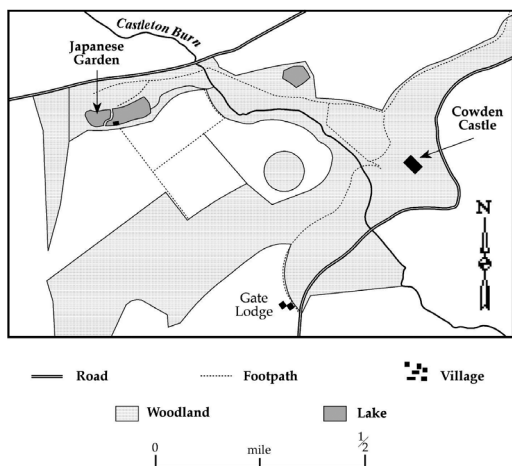


図7 コウデン城地所の日本庭園の位置  
(出典：Tachibana et al, 2004)

- (c) アリスの義理の娘（アリスの息子ジョンの妻）Averil Stewart が執筆したエラとアリスの伝記 *Alicella*. (1955) に所収される ‘Chapter 18. The Japanese Garden’ (p.210-218)
- (d) アリスの孫の Robert Stewart of Arndean が、コウデンの庭園を1955年に公開したときに作成した小冊子 *The Japanese Gardens at Cowden: A Brief History and description*. Produced by the Episcopal church of St James, Dollar, on the occasion of a special opening of the gardens in aid of church funds, on the 28th May 1955. (日本庭園 ‘Shah-rak-uen’ の手書きスケッチマップつき) くわえて、筆者は、1999年に Robert Stewart 氏を訪れ、インタビューし、写真を見せて頂いた。また書簡のやりとりも行っている。

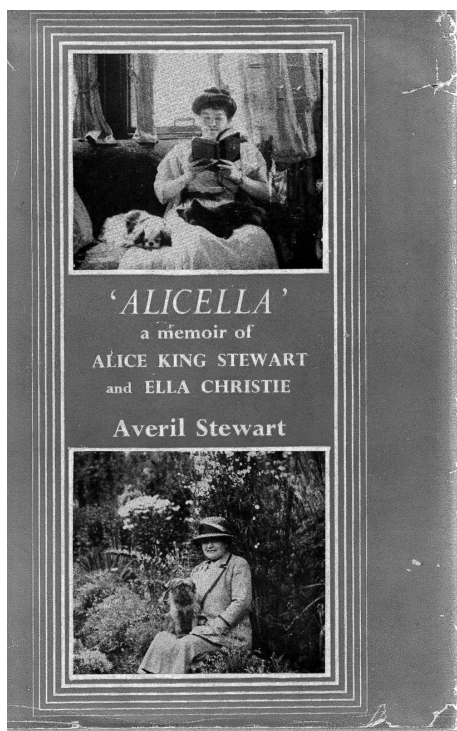


図8 Averil Stewartが1955年に刊行したエラとアリスの伝記 *Alicella* の表紙

## V. 資料からみる ‘Shah-rak-uen’ 造園のプロセス

### i) 日本滞在時のエラの行動

#### ①日本で日本庭園訪問：庭園愛好家ドゥ・カイン姉妹の指南

エラは、日本に到着後、桜の花の美しく咲く4月を「古い首都」である京都で、5月を「新しい首都」である東京で過ごした。

エラは、京都では、円山公園にある日本の初期の西洋式ホテルである Yaami Hotel に宿泊している。彼女は、そこのレターペーパーで妹のアリスへ書簡を出している。エラは、宿泊した Yaami Hotel についてアリスへ次のように書き送っている。「火事で焼け残ったのであるが、充分快適である。一日28シリングで宿泊でき、その料金には、ドリンク以外はすべて含まれて

いる。バルコニーからの眺めは素敵で、街区を見下ろすことができ、遠景には丘が見える」(1907年4月24日、エラ (Yaami Hotel, Maruyama Park, Kyoto, Japan) からアリスへの書簡。Stewart-Christie Papers, National Library of Scotland 所蔵。)

エラが目にしたのは、「日々ヨーロッパ化していく日本」であった。彼女は、「古い日本 (old Japan) を見ることを熱望している」と妹に書き送った。エラは、京都でデュ・カイン姉妹に出会い、彼女たちを指南役に日本の多くの庭園を見てまわった。デュ・カイン姉妹は、後に *The Flowers and gardens of Japan* (1908) を刊行した。エラが見たいと熱望した *old Japan* とは、日本の庭園の風景だった。エラが、デュ・カイン姉妹とともに、ある日本の寺に藤の花を見に行ったとき、彼女にある考えがひらめいた。「日本人を一人、自分の家に連れ帰って、私の池をレイアウトしてもらおう。そうしたら、夢のような美しさを実現できるであろう…」と。(Stewart, 1955: p.210)

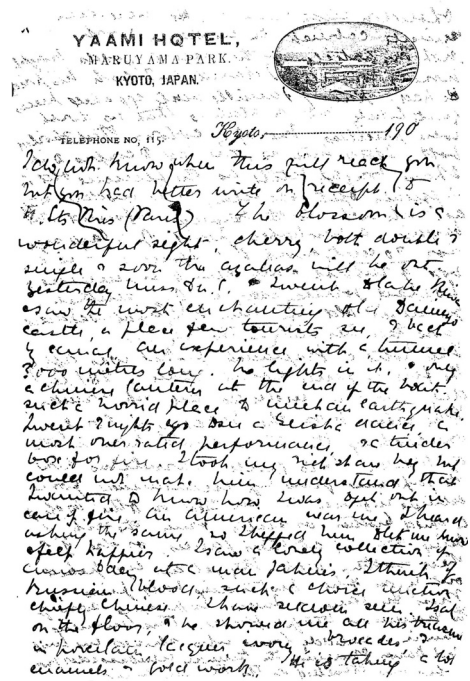


図9 エラの京都の宿泊先 Yaami Hotel のレターペーパーに記された書簡  
(出典: The Stewart-Christie Papers, National Library of Scotland)

## ②ジョサイア・コンドルからエラ・クリスティーへの日本庭園造園アドバイスの書簡

エラは、故郷の地所に日本庭園を造園しようという計画を実行にうつそうと段取りをはじめた。はじめにコンタクトをとったのは、当時日本に滞在していたお雇い外国人建築家のジョサイア・コンドルだった。コンドルは、先に紹介した日本庭園についての本を1893年に刊行していて、世界漫遊旅行者にとっては、日本庭園についての権威だった。エラのコンドルへの手紙に対して、コンドルの返事の手稿書簡が、The National Library of Scotland に所蔵される Stewart-Christie Papers (Acc.5058) の中にある。(資料a) コンドルによるエラへの手紙は1907年5月9日付けで、宛名は Ella Christie、住所は Imperial Hotel and Villa, Tokio となっている。コンドルは、エラに手紙の中で、横浜にあるヨコハマ・ナーサリー・カンパニー (横浜植木) を使うことを推薦した。コンドルによるとそこには「庭についてどのような質問にも答えられる英語の話せる専門家がいて、あなたにふさわしい日本のデザインを提供してくれて、木や灌木、石、灯籠なども適切に選んで、助言をしてくれますよ」(英文からの翻訳は筆書による)ということであった。以下にこの引用の元になったコンドルからエラへの手稿の英文の全文を

記す。手稿からの翻刻は筆者による。

Dear Madam,

In reply to your letter of yesterdays date I think you cannot do better than apply to the Yokohama Nursery Company Ltd. at No 21-35 Nakamura Yokohama- otherwise called the Gardeners Association.

You will find there English speaking experts acquainted with all branches of gardening who will if asked, I think, supply you with suitable Japanese designs for gardens as well as advising you upon selections of trees shrubs, stones, lanterns etc.

None of the Tokio gardeners would be able to assist you in the same way: they lack both organisation and acquaintance with matters of foreign export, and to attempt to get what you require from them you would have to put yourself into the hands of guides or unreliable interpreter and would in all probability be greatly disappointed.

I remain

yours faithfully

Josiah Conder

(Letter from Josiah Conder to Ella Christie (Imperial Hotel and Villa, Tokio) on 9th May 1907, held in the Stewart-Christie Papers (Acc.5058), The National Library of Scotland)

コンドルがエラへ出したこの書簡が示すように、富裕な世界漫遊旅行者が故郷で日本庭園を造園したいという希望をかなえるような準備が日本側の園芸業者にもビジネスとして整いつつあったことがうかがえる。その中でもコンドルも推薦した横浜植木は有名で、毎年美しいカラー表紙で多くの写真入りの英文のメールオーダーカタログを発行しつつあった。

## ii) 3人の日本人と‘Shah-rak-uen’造園のプロセス

資料(a)～(d)によると、エラの‘Shah-rak-uen’の造園には、3人の日本人が深くかかわっている。

エラの頭の中にある日本庭園のイメージを実現する庭園デザイナーとしてはじめに雇われたのはタキ・ホンダ Taki Honda という日本女性であった。彼女は、名古屋の「ロイヤル・スクール・オブ・ガーデン・デザイン」Royal School of Garden Design at Nagoya の出身だという。タキ・ホンダは、エラとともに6週間かけて、日本庭園の予定地の沼地を精査した。彼らは、池を整地し、島や橋のある池泉回遊式庭園の造園をめざした。彼らは、一部は日本の Imperial Palace Gardens の ‘ancient rule’ にもとづき、また、Master’s Isle と Guest’s Isle などはコンドルの *Landscape Gardening in Japan* (1893) からデザインをコピーした。彼らは、その土地ロー

カルな石灰岩を池の北西部分に注意深く配置して富士山 Fuji-yama とみたとて、聖なる地 ‘sacred domain’ を創造した。

また、エラは、庭園に配置する石灯籠 3 基 (Large Kasuga stone Lantern (奈良1808年製) 45 円、Smaller Kasuga stone Lantern (京都1823年製) 40円、Snowing Viewing stone Lantern (奈良1778 年製) 30円) を京都の骨董商 Daikokuya (J.Imai) から、1908年10月13日付で購入した。梱包料は、20円で、京都から神戸までの輸送料は 6 円38銭、神戸からロンドンまでの輸送料は41円 2 銭、保険料が60銭であった。それらの商品は、日本郵船会社の Inabamaru でロンドンに11月23日に到着するということをしるした書簡をエラは Daikokuya から受け取っている。(資料(a)より)

この Daikokuya からの書簡によると、石灯籠には、苔むした状態を保つためのアドバイスがされている。「長時間の輸送の間に、石灯籠をおおように生えていた苔が乾燥してしまっているでしょう。その場合は、お米のとぎ汁をミルク色になるぐらいまでの濃度に調節したぬるま湯の中に浸してください。このような処理を何度かするうちによい状態になるでしょう。」と記されている。しかし、スコットランドでは、この処置は効果がなかった。スコットランドに生息するミソサザイが、苔の中にいる虫を探して食い尽くし、たった一日で、苔はなくなってしまったと記述されている。(A.Stewart, 1955: p.212)

さらに庭園プランの改良を提案し、アドバイスをするガーデンデザイナーとして活躍したのは、スズキ教授 Prof. J.Suzuki である。資料(a)には、1925年から1936年にわたってスズキがエラに宛てた10通の書簡が残っている：

Letter from Suzuki (8 New Oxford Street. London) on 6-10- 1925.

Letter from Suzuki (14B. Morat Street. Brixton. London) on 1 Dec. 1932.

Letter from Suzuki (14B. Morat Street. Brixton. London) on 28 Dec. 1932.

Letter from Suzuki (74 Baso Chikusacho. Nagoya. Japan) on 5. 11. 1933.

Letter from Suzuki (14B. Morat Street. Brixton. London) on 18.12.1933. (“Yatsuhashi”)

Letter from Suzuki (Ward 9. Colindale Hospital. Hendon. London) on 15-2- 1935.

Letter from Suzuki (Ward 9. Colindale Hospital. Hendon. London) on 23-3-1935.



図10 Taki Honda の肖像写真  
(出典：Robert Stewart 氏提供)

Letter from Suzuki (Ward 9. Colindale Hospital.  
Hendon. London) on 23-7-1935.

Letter from Suzuki (Bed 12. Ward 9. Colindale  
Hospital. Hendon. London) on Oct 2.1935

Letter from Suzuki (Ward 1A. Colindale Hosp.  
Hendon, London) on 12-10-1936.

書簡には、‘Japanese garden designing of the “Soami” school. established 15th cent. J.Suzuki, Prof. The 18th Hereditary head of the School’ と印刷されたオリジナルのレターペーパーを使用している。このレターペーパーは、スズキの庭園デザインが、古来からの日本の正統な庭園デザインの一系統 the “Soami” school をひいていて、自らが日本国外の顧客に提案する日本庭園デザインが真正性をもつということを主張していると解釈できる。(図12参照)

初めてのスズキからエラへの書簡は1925年10月6日付けで、新しい日本庭園の庭師であるShinzaburo Matsuoを紹介している。彼が、3人目の日本人としてエラの日本庭園に関わることになるマツオである。マツオは、地震で家族全員を失い、天涯孤独の身の上だと語られている。

スズキがエラに出した書簡は、主に庭園デザインの改良に関する提案であった。しかし、時には私的な頼み事をすることもあった。たとえば、1935年7月23日付けの書簡では、病院にかかっている間の、金銭の前借りの相談を行っている。これは、庭園デザインについてのやりとりを重ねる中でエラとスズキの間に庭園にかかわるビジネスだけではないような人間的な信頼関係が築かれたことを示唆する。スズキにとっては、エラのように日本庭園を自邸に造園し維持管理したいと考えるような英国人の地主は確かに上等の顧客である。しかし、歴史的に見て、1930年代は、英国人の地主が、庭園に、お金を注ぎ込んで、壮麗な理想の庭園を実現させることのできた最後の時代であった。1933年11月5日に、スズキは、名古屋からエラにあてた書簡の中で、「日本には、私の仕事はまったくありません。さきの金融危機でいまや日本の紳士は、庭園には、お金を使わなくなってしまったのです。わたしは、ここよりは、ずっとよい状況の英国に帰りたいと考えています。」と嘆いている。1930年代の状況は、エラが日本庭園をはじめて造りはじめた1907年とは大きく違ってきた。スズキは、一日3ポンドのコンサルタント料

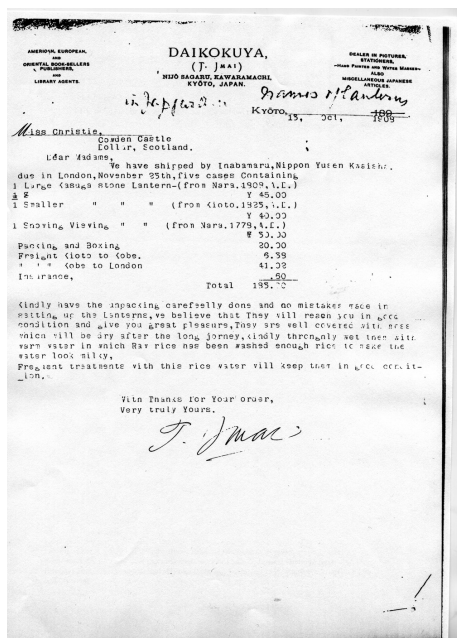


図11 Daikōkuya から Ella Christie への送り状  
(出典：A Folder of Papers, 1908-33, concerning the Japanese Garden at Cowden in the Stewart-Christie Papers (Box 10. XIII Miscellaneous-3) National Library of Scotland)

金で顧客の庭園を訪問した。マツオは、1925年から、コウデン城で、週2ポンドの賃金で庭師として働いた。スズキが、マツオを紹介して以来、エラの庭園の維持管理はスズキの専門的な植物知識とデザインの改良の提案とマツオの日常の勤勉さに支えられてきた。日本庭園の改良についての提案を庭園の施主にもちかけることは、日本の文化、自然、哲学と深く結びついた企業家精神を発揮することであった。スズキは、ときには、すばらしく魅力的な提案をすることがあった。これから、日本庭園の橋のデザインについてどのように、スズキがデザインの改良の提案をするのか、その考えを推し進めていくときに、どのように施主であるエラを説得するためレトリックを使うのかについて具体的にみることにする。日本庭園にそれまであった橋をより魅力的な「八つ橋」‘the zig-zag bridge named *Yatsu-hash*i.’に変更するというのがスズキの出した提案である。この提案をはじめスズキがエラにもちかけるのが、次に紹介する1932年12月1日付けの書簡である。次に、この書簡の全文を紹介する。手稿からの翻刻は筆者による。

Miss Christie  
Cowden Castle  
Dollar, N.B.

Dear Madam,

I suppose Matsuo has not wanted yet my help for pruning as I did enough on my visit, the year before last winter.

But, there is one thing which I have to draw your thorough attention to the garden bridges.

As you would probably remembered [sic], I have had suggested you every time on my visits upon your's, to build real Japanese style of bridge, but I failed to make you do it as it looks Japanesry and was steady.

Last summer, my friend Dr Shephard visited on your garden on the way his sojourn to Dundee and found the garden is best one what he has had seen till then, among of those Japanese garden in the Continent and in U.S.A., of course, he is a learned of things of Japan so that he sometimes delivered the lecture in the societies about Japanese arts.

On his returned to home, he accused me “why built wrong soil-bridge” which he could hardly cross over with fear of slip and lamented one thing as a whole things--- I puzzled to reply.

I am now going back to Japan on next Feb., and anxious I could come back again this country.

It is a matter of regret to me to leave even one wrong in the garden that I concerned; and the matter of fee is of secondary importance, and I could leave it on to you, if you would care to consider the alteration wrong to right. I estimate this 8 days to finish with Matsuo and 2 men except one carpenter, to make present bridge to Japanese soil-log bridge with turf edged just like Conder's picture.

Hoping you could kindly answer me in your earliest as I am now booking the date.

I am Madam

yours very respectfully

J. Suzuki

(Letter from J.Suzuki (14B Morat Street, Brixton) to Ella Christie (Cowden Castle, Dollar, N.B.) on 1st Dec. 1932. held at the Stewart-Christie Papers, The National Library of Scotland)

このスズキの書簡のレトリックはふたつある。ひとつは、橋のデザインの変更に関する提案をより説得するために日本美術に造詣が深い英国人 Dr Shephard の意見を紹介したことである。それによって、スズキの言説により信頼性をもたせることができた。ふたつめは、デザイン変更にかかる費用のことである。「費用のことは二の次である」と格安の料金設定で行うことを示唆している。

スズキは、いつでもエラの地所コウデン城の庭園を注意深く賞賛している。次に引用するのは、スズキの1932年12月28日付けのエラへの書簡である。

My dear Christie, as I know your appreciation of artistic gardens, your own among which is best in Europe and America by a just little alternation [sic.] that is I am sure you will be pleased to see a poetic scenery with the result and that it will be well worth the extra expence.

(Letter from Suzuki (14B. Morat Street. Brixton. London) to Ella Christie (Cowden Castle, Dollar, N.B.) on 28 Dec. 1932. held at the Stewart-Christie Papers, The National Library of Scotland)

スズキは、橋のデザインを「八つ橋」に改良することは、庭園全体のデザインの空間的コンテキストからみてもっとも重要なことだとエラを説得しようとした。しかしながら、スズキもコウデン城で庭園のデザイン改良の仕事を獲得することに必死であった。というのは、コンウォールの別の庭園の仕事を失ったばかりだったからだ。さらに、スズキは、英国の日本庭園において最も重要視されている権威であるコンドルの日本庭園紹介の著作 *Landscape Gardening in*

Japan にも言及することを忘れなかった：‘make present bridge to Japanese soil-log bridge with turf edged just like Conder’s picture’ と。続いて、スズキは、日本の伝統の橋である「八つ橋」に関する起源についての物語 ‘The origin of Yatsubashi or eight plank bridges’ をタイプうちで2ページにまとめて、エラに提供した。また、「八つ橋」についてのスケッチマップを作成して、デザイン改良の提案を行った。(図13参照)

このスズキの提案をエラは、受け入れた。1933年1月7日から24日までの期間で庭園の改良の工事が行われた。この仕事の1933年1月24日付の請求書によると、スズキは、15日間の労働で22ポンド10シリングを受け取った。これは、1日3ポンドの庭園コンサルタント料金の設定を行っているスズキにとっては、特別割引料金であった。

コンドルの日本庭園についての著作 *Landscape Gardening in Japan* は、日本の真正な日本庭園の英語文化圏への紹介書であるが、その本の中で紹介しているデザインは、パターンブックのように、英国の日本庭園愛好家たちに利用されてきたと推測できる。コンドルの日本庭園についての本で紹介しているデザインを、カタログのように好きな部分を切り取って、自邸の庭園に「コピー」されたこともあっただろう。

それに対して、タキ・ホンダ、スズキ、マツオのようなコウデン城で活躍した日本人の庭園デザイナーや庭師の果たす役割は、日本庭園のより真正な紹介という点から大きいと考えられる。この3人の日本人のおかげで、エラの日本庭園 ‘Shah-rak-uen’ は、コンドルの著名な著作のコピーを試みた日本庭園にとどまらず、日本庭園としての真正性

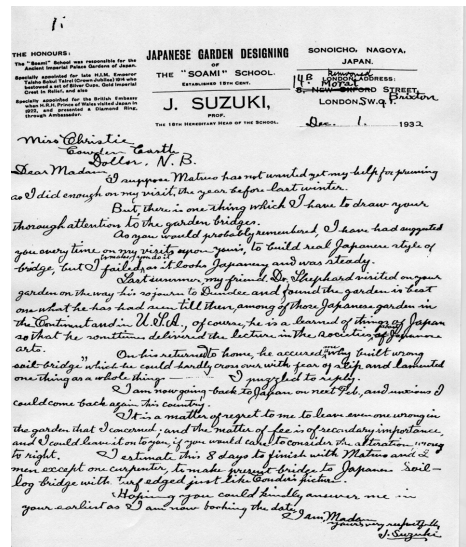


図12 スズキの使用するレターペーパーの一例。1932年12月1日に Suzuki から Ella に出した書簡。Suzuki は橋のデザインの変更の提案を行っている。

(出典：A Folder of Papers, 1908-33, concerning the Japanese Garden at Cowden in the Stewart-Christie Papers (Box 10. XIII Miscellaneous-3) National Library of Scotland)

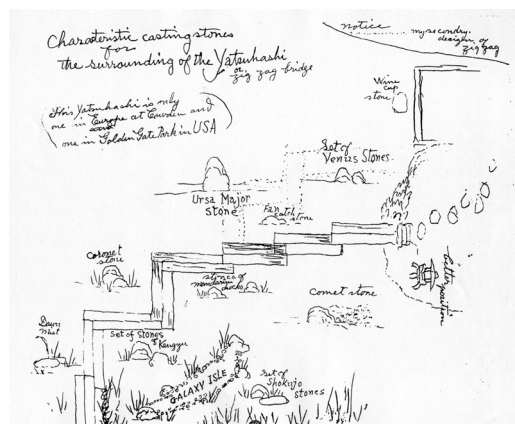


図13 Suzuki から Ella への書簡。Yatsubashi or zig zag bridge へのデザイン変更の提案を記す書簡に添付されたイラスト

(出典：A Folder of Papers, 1908-33, concerning the Japanese Garden at Cowden in the Stewart-Christie Papers (Box 10. XIII Miscellaneous-3) National Library of Scotland)

authenticity を獲得したのではないかと考えられる。

のみならず、庭園についての考えを施主である英国人の地主と話し合い、分かち合い、時には対峙しあいながら、英国のローカルな樹木、草木、岩石、小川のような自然を観察して生かすような日本庭園の紹介を目指すとき、英国の日本庭園は、英国の自然や文化にとけ込むような異種混淆性 hybridity をもちあわせているのである。

庭師であるマツオは、誠実で几帳面な人柄だと記されているが、英語は話すことができなかった。この点も、英語を駆使して、日本庭園のデザインを売り込んでいった、庭園デザイナーのスズキとは対照的である。しかし、エラとマツオは、庭園の中では植物や園芸のことについて、コミュニケーションは充分にとれたという。植物を媒介にした、言葉ではない ‘a kind of hybrid conversation’ (Stewart, 1955: p.216) が、彼らを結んでいたと語られている。

## VI. おわりに：コウデン城の日本庭園 ‘Shah-rak-uen’ の社会性

以上の資料から、エラは、スコットランドのコウデン城で、日本庭園のあるライフスタイルを楽しんでいたことを読みとることができる。日本庭園を、庭師とともに世話し、みずからくつろぎ、客をもてなした。とくに、エラにとって、‘Shah-rak-uen’ は、多くの友人たちをもてなす接客空間でもあった。池泉回遊式庭園を歩き回り、茶室でピクニックやティー・パーティーをし、池で魚釣りまで楽しんだ。

エラ一家と親しく行き来していた友人に、著名な民俗学者・作家・編集者のアンドリュー・ラング (1844-1912) がいた。図16の写真では、エラとアンドリュー・ラングが、‘Shah-rak-uen’ で、魚釣りを楽しんでいる。エラはアンドリュー・ラングを、‘Shah-rak-uen’ で、たびたびもてなしたが、エラが昼食の時間も忘れるぐらい日本庭園に没頭していたので、お腹のすいたアンドリュー・ラングは、エラの妹のアリスに「あなたの姉さんは、日本庭園にいるときは

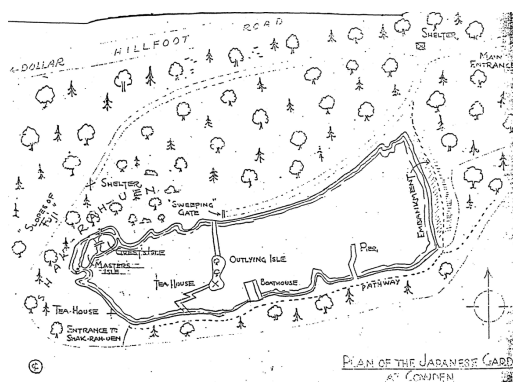


図14 資料(d)の Robert Stewart (1955) による ‘Shah-rak-uen’ のスケッチマップ  
(出典：Robert Stewart 氏提供)



図15 1930年ころの ‘Shah-rak-uen’ とエラ・クリスティー  
(出典：Robert Stewart 氏提供)

時間を忘れてしまうね。」(Stewart, 1955: p.210) と言うぐらいであった。

エラの大切な日本庭園 ‘Shah-rak-uen’ は、エラ個人の邸宅につくられた個人の庭園であるが、同時に、エラが、多くの友人知人をゲストとして招いた社交の舞台であり、文化サロンのような役割を果たしていた。庭園は、友人たちが集い楽しむ場所であった。エラとアリスの伝記である *Alicella* にも、「日本庭園への巡礼なくして、コウデンを訪問したことにはならない」(A.Stewart, 1955: p.299) と記されている。

19世紀後半から20世紀初期の英国では、ジャポニズムとよばれる日本趣味が一つの文化的潮流であった。これらの愛好者たちの中には、日本庭園を造園し、お互いに訪問しあうこともあったであろう。コウデンで庭園コンサルタントを行ったスズキを媒介に、日本庭園 ‘Shah-rak-uen’ の情報がひろがることもあった。V章で分析したように、スズキが、書簡で言及した Dr Shephard は日本美術に造詣の深い英国人の日本愛好者であった。彼が ‘Shah-rak-uen’ を訪問した後で、スズキに述べたエラの日本庭園についての感想が、スズキの新たな庭園改良の契機となったことから考えられるように、庭園は多くの人々が訪れることによって思想の交流の場所になり、実践の場所となった。

英国では、「オープンガーデン」の日時を設けて、庭園を一般市民に公開する伝統がある。英国の文学研究者 Adrian Tinniswood による *The Polite Tourist* によると、英国には、見る価値のあるカントリーハウスとその庭園を一般市民に公開するという「カントリーハウス観光」の伝統は数百年にもさかのぼれるという。(Tinniswood, 1998)

エラの日本庭園 ‘Shah-rak-uen’ の唯一の公式ガイドブックともいえる6ページのタイプラウチによる小冊子は、エラの死後、アリスの孫にあたる Robert Stewart が、1955年5月28日にオープンガーデンを行ったときに執筆している。(IV章の資料(d)) エラの日本庭園のはじめてのガイドブックは、庭園について直接、当事者として語ることでできる人のいなくなったエラの死後、オープンガーデンを契機に製作された。このときが、エラの日本庭園 ‘Shah-rak-uen’ が往時の姿で一般公開された最後であった。

エラの日本庭園 ‘Shah-rak-uen’ は、個人の庭園であるが、閉じられていた空間ではなくて、エラの周りに集う文化人や庭園愛好家などのゲストや、オープンガーデンの日に訪れるゲストに開かれることによって、庭園についての情報や思想の交流がみられる社会性をもった場所に



図16 ‘Shah-rak-uen’ で、魚釣りを楽しむエラ・クリスティーとアンドリュー・ラング (出典: Robert Stewart 氏提供)

なった。

## 参考文献

- 井野瀬久美恵「旅の大衆化か、差別化か? : トマス・クック社発展の影で」石森秀三編 (1996) 『観光の20世紀』ドメス出版 (p.27-42)
- ジュール・ヴェルヌ (鈴木啓二訳) (2001; 原著は1873) 『八十日間世界一周』岩波文庫
- オールコック (山口光朔訳) (1962) 『大君の都: 幕末日本滞在記』岩波文庫
- グリフィス (山下英一訳) (1984) 『明治日本体験記』平凡社
- 白幡洋三郎 (1994) 『プラント・ハンター』講談社
- 鈴木誠編 (2006) 『海外の日本庭園』日本造園学会
- 園田英弘 (2003) 『世界一周の誕生: グローバリズムの起源』文春新書
- チェンバレン (高梨健吉訳) (1969) 『日本事物誌』平凡社 (東洋文庫)
- 日英博覧会出品協会残務係編 (1911) 『日英博覧会出品協会事務報告』
- R フォーチュン (三宅馨訳) (1997文庫版 (原著は1863)) 『幕末日本探訪記: 江戸と北京』講談社学術文庫
- ピアーズ・ブレンドン (石井昭夫訳) (1995) 『トマス・クック物語: 近代ツーリズムの創始者』中央公論社
- 本城靖久 (1996) 『トーマス・クックの旅: 近代ツーリズムの誕生』講談社現代新書
- 本多錦吉郎 (鈴木誠編) (2007 (原著は1890)) 『図解庭造法』マール社
- 橘セツ (2006) 「庭園をめぐるライフヒストリー／ライフジオグラフィー: 英国人植物学者レジナルド・ファラーの日本旅行とロックガーデンに魅せられた人生」『神戸山手大学紀要』第8号 (p.89-104)
- 横浜開港資料館編 (1996) 図録『世界漫遊家たちのニッポン: 日記と旅行記とガイドブック』
- エリック・リード (伊藤誓訳) (1993) 『旅の思想史: ギルガメシュ叙事詩から世界観光旅行へ』法政大学出版局
- Birkett, Dea. (1989) *Spinsters Abroad: Victorian Lady Explorers*. Basil Blackwell. Oxford.
- Christie, Ella and Stewart, Alice King. (1940) *A Long Look at Life: By Two Victorians*. Seeley Service. London.
- Christie, Ella. (1925) *Through Khiva to Golden Samarkand*. Seeley Service. London.
- Conder, Josiah. (1893) *Landscape gardening in Japan*. Kelly and Co. Tokio.
- Conway, Judith. (1988) *Japanese Influences on English Gardens*. Unpublished thesis submitted for Architectural Association, Conservation of Gardens Course.
- Conway, Hazel. (1991) *People's Parks: The Design and Development of Victorian Parks in Britain*. Cambridge University Press.
- Daniels, Sephen and Nash, Catherine. (2004) 'Lifepaths: geography and biography' *Journal of Historical Geography*. 30-3. (449-458)
- Du Cane, Florence and Ella. (1908) *The Flowers and Gardens of Japan*. Adam and Charles Black. London.
- Griffis, William Elliot. (1876) *The Mikado's Empire; Book1. History of Japan, From 660 B.C. to 1872 A.D.* *Book2. Personal Experiences, Observations, and Studies in Japan, 1870-1874*. Harper & Brothers, Publishers.
- Herries, A. (2001) *Japanese Gardens in Britain*. Shire Books. Princes Risborough.
- (1911) *Official Report of the Japan British Exhibition 1910, at the Great White City*. Unwin Brothers, Limited.

- Stewart, Averil. (1955) *'Alicella': A Memoir of Alice King Stewart and Ella Christie*. John Murray. London.
- Tachibana, Setsu. (2000) *Travel, plants and cross-cultural landscapes: British representation of Japan, 1860-1914*. Unpublished PhD thesis submitted to the University of Nottingham.
- Tachibana, Setsu; Daniels, Stephen and Watkins, Charles (2004) 'Japanese gardens in Edwardian Britain: landscape and transculturation' *Journal of Historical Geography* 30-2 (364-394)
- Tinniswood, Adrian (1998) *The Polite Tourist: A History of Country House Visiting*. The National Trust. London.